

# 月刊 介護保険

介護に携わる人の  
応援マガジン

特集

## 2025年を見据えて 第6期事業計画を策定

原勝則老健局長が全国厚生労働部局長会議で説明

2014

3

vol.217

● 現地ルポ—自治体編

「とおのICT健康塾」でコミュニティづくりに成功  
岩手県遠野市の取り組み

● 現地ルポ—事業者編

初心に戻って理想の施設をめざす  
「上石神井特別養護老人ホーム」(東京都練馬区)

● レポート

広がる介護職ネットワーク  
事業所や職種の垣根を超えて交流

## 街

へ出よう！

「トラベルヘルパーが教える外出の

コツ

」

豊かさから幸せへ  
旅は最高のリハビリ！

ホスピタリティ人材の育成派遣会社を創業してしばらくしたころ、高齢者サービスに特化すると決めてトラベルヘルパー（外出支援専門員）の育成を始めました。20年前のことです。介護という言葉自体なじみが薄く、誰に話しても介護付き旅行は理解どころか想像さえできないという反応でした。今でこそ年に1000件近い介護旅行の希望を聞き、毎日のようにトラベルヘルパーになりたいという人の相談を受け、必要に応じた専門教育を行っていますが、当時は年に10件もありませんでした。

平成12年に介護保険制度が始まり日本のサービスは格段の進歩を遂げ、今では世界の手本になる点も多くあります。しかし、旅を楽しむ元気なお年寄りに接した後に施設へうかがうと、一日中無表情でじっとしている人が多いことに違和感を覚えます。同じ時代に育ち、きちんと勤め上げた普通の人々が、健康を失っただけでお墓参りさえがまんしなければならない暮らしに悲しくなりました。人を幸せにすることを福祉と捉えているので、この違和感を自分なりに解消しようと努めています。

お年寄りには豊富な人生経験の塊で、学校が教えてくれないことをよく知っていますから、若者がお年寄りに介護で力を貸し、お年寄りが経験を語ることで若者が育つ、そんな環境が福祉の仕事にはあると、介護旅行に携わり知ることができました。

一方で、旅もまた多くの学びを与えてくれる場ですから、介護職には広くほかの世界をみてほしい。とくに若い人には、視野を広げ感受性を鍛える場として旅を活かしてほしいと思います。

今、協会で学ぶ人の多くが介護職ですが、自身が所属する組織や地域の質を上げようと努力する人が集うようになりました。自己投資をしてがんばるくらいですから、福祉に対する意識は高く、他者の役に立とうとする努力が働く喜びを与え、自らの仕事の価値を高めてくれる、そんなことを知る老若男女です。被災地で活躍する人もいます。豊かさの先にある幸せをつかもうと努力しており、こうした仲間に出会える仕事に感謝しています。

この原稿を書く間にも、「残念ながら、母親が昨日亡くなりました。生前には、旅行や観劇を実施できましたから、よい思い出となり、本当に助かりました。皆さん方のような会社があったことは、救いの手でした」と励ましの声をいただきました。

介護旅行は、たんに屋外で車いすを操作することやトイレのバリアフリーの状況をチェックすることではありません。公共の場に出ていくには掟がありますし、担い手の安全など就労環境を整えるのも大事な仕事です。

家族がトラベルヘルパーの存在を知り、介護のある暮らしを楽しむ助けとなることで、介護保険制度のサービスと同様に、介護家族の負担が軽減されるとうれしいと思っています。



NPO法人  
日本トラベルヘルパー協会  
理事長 篠塚 恭一

## PROFILE しのづか・きょういち

株式会社SPIあ・える倶楽部代表取締役。  
平成18年にNPO法人日本トラベルヘルパー  
(外出支援専門員)協会を設立。